教育分野での女性の起業―マトリックス履歴書からの考察―
Female Entrepreneurs in the Education Industry –An Analysis using Matrix Resume－

西口　美津子†　　伊藤　茉理††

Mitsuko NISHIGUCHI†　　Mari ITO††

†福島工業高等専門学校　Dept. of Communication & Information Science, Fukushima College
††福島工業高等専門学校　Business Communication, Fukushima College

E-mail:　†nishiguchi@fukushima-nct.ac.jp,　††10504@fsnct.com

1. はじめに

近年、日本では女性の社会進出や、女性の活躍が期待されている。これまで、平成 18 年に男女雇用機会均等法が施行され、平成 25 年に改正されるなど、女性の仕事環境が整備されてきた。しかし、女性の離職率は依然として高いままである。内閣府の調査によると、離職する要因としては、結婚や出産、育児、介護などが挙げられる[1]。このような一度仕事から離れた女性が、育児などが落ち着き、再度社会で活躍する分野として、自ら事業をはじめる「起業」が注目されている。

本研究では、起業の中でも「教育分野」に絞り、同志社女子大学を創設し、2013 年には NHK 大河ドラマ「八重の桜」で注目された地元福島県の新島八重と、日本初の海外女子留学生として津田塾大学を創立した津田梅子を採り上げる。共に大学の前身となる学校を設立した二人を「女性起業家」として捉え、教育分野における女性の起業について考察する。

2. 女性の起業

2.1 起業の定義

フランスの経済学者、J・B・セイによると、起業家は「経済的な資源を生産性が低いところから高いところへ、収益が小さなところから大きなところへ移す」と定義されているが、この定義は、具体的に起業家がどのような者かは述べられていない。1800 年に定義されて以来、いまだに起業家の定義は確立されておらず、P・F・ドラッカーは、アメリカにおいて、「小さな事業を始める人」を起業家と呼び、起業家的な事業は、「何か新しいもの、異質なものを創造する。変革をもたらし、価値を創造する」と述べている[2]。 そこで、本研究では、「学校の創設」を起業のひとつとしてとらえ、分析を行う。

2.2 女性起業家の現状

教育分野での女性の起業について考察していく上で、はじめに先行研究から現代の女性起業家の現状を把握する。図 1 は総合起業活動指数（「18～64 歳の人口に占める起業者（起業準備中の人と設立から 3 年半に満たない企業を経営している人の合計）の割合」の国際比較を表したものを示す[3]。

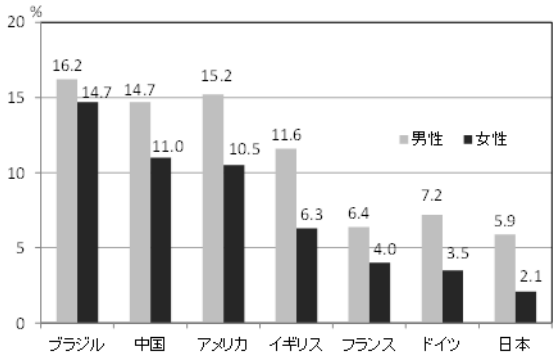

図 1 男女別の総合起業活動指数の国際比較

比較対象は、日本、アメリカ、中国、ドイツ、イギリス、フランス、ブラジルの 7 カ国である。世界中で、女性は男性に比べて低いことが共通しており、その中で、日本は、男性は 5.9%、女性は 2.1%と男女ともに最も少ないことがわかる。

女性起業家の業種としては、表 1 に示すように、「個人向けサービス業」が最も多く 25.2%をしめている[3]。そのうち、美容業が約半数を占めている[1]。このことから、女性起業家は主に同性をターゲットとして起業しているということが言える。次に多い業種は「医療、福祉」で 19.2%、その次が「飲食店、宿泊業」の 15%で、上位 3 業種が半数以上を占め、これらに「小売業」「事業者向けサービス業」、「卸売業」、「教育、学習支援業」を加えた、どちらかというと接客に関わる 7 項目で約 9 割を占めている。一方、男性は、20%を超えている業種がなく、起業の業種が分散しており、建設業での起業が女性の 8 倍近くあるのが特徴的である。

表 1　女性起業家の業種

（単位：%）

業種	女性 (n=401)	男性 (n=2610)	業種	女性 (n=401)	男性 (n=2610)
個人向けサービス業	25.2	10.9	製造業	2.5	5.4
医療、福祉	19.2	13.0	不動産業	2.5	5.1
飲食店、宿泊業	15.0	11.1	建設業	1.5	11.9
小売業	12.0	11.6	情報通信業	1.2	4.1
事業者向けサービス業	9.2	11.6	運輸業	1.2	3.4
卸売業	6.0	7.5	その他	0.7	1.8
教育、学習支援業	3.7	2.7	合計	100	100

3. 八重と梅子のマトリックス履歴書

3.1 マトリックス履歴書とは何か

マトリックス履歴書とは、職歴を分析するための有効なツールである[4]。一般の履歴書は、上から下に同じ列に連続して記述する。マトリックス履歴書では、図 2 のように、逐次右側の列にシフトして段違いに記述することにより、期間 A の右側には空間が生じる。その空間には、期間 A の項目に関連・対応する期間 B の関連用語を記入していく。このようにマトリックス的に展開し記述することにより、相互に関係する内容を把握したり、新たに発見したりすることが可能になるのである。

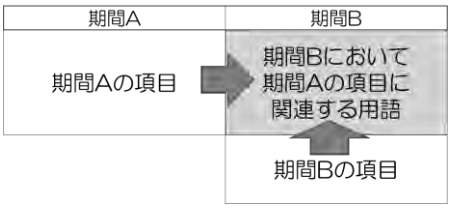

図 2 マトリックス履歴書

3.2 新島八重のマトリックス履歴書

過去に出版された新島八重の略年表や文献調査[5][6][7][8]をもとに、新島八重のマトリックス履歴書を作成した（図 3 参照）。その結果、新島八重が起業に至るまでにどのようなスキルをいつ習得したかが明らかになった。

図 3 のマトリックス履歴書に示す通り、新島八重は会津藩士・砲術師範の家柄で育ち、幼少期の時点で洋式砲術に関心を持っており、その関心が、以後の新島襄と結婚後の生活にも反映されているということが分かった。会津戦争時には、その関心により習得した洋式砲術の技術をいかし、スペンサー銃

0~20歳	21~29歳	30~32歳	33~44歳	45~87歳
1845~1865	1866~1874	1875~1877	1878~1889	1890~1932
[誕生から結婚まで] 会津藩士、砲術師範の家柄 什の掟の暗唱 男女別教育 男勝りな性格	洋式砲術技術・知識の習得 戊辰戦争への参戦 手芸・機織技術の習得 男装で夜襲へ参加	洋学の思考を身につける 負傷者の看護	新たな夫婦のあり方を実践（レディーファースト） 新島襄への献身的な看病	篤志看護婦を女性の職業として確立
	[戊辰戦争からキリスト教との出会いまで] 兄・覚馬が住む京都へ転居 女紅場の権舎長兼機織教導試補となる 裏千家十三代千宗室の母と知り合う 宣教師ゴードンに聖書を習う	教育行政への参加 女紅場についての運営予算を槙村権知事に直談判する 茶道に親しむようになる 洗礼を受ける	女子教育機関の必要性を主張 茶道の資格取得 積極的な教会活動への参加	女性の社会進出を期待する 茶の湯を生きがいとし、稽古を行う
		[新島襄との出会い] 新島襄と出会う 日本人クリスチャン初の結婚式 同志社英学校が設立される 私塾、京都ホームを開設	キリスト教伝道の重要性を確認 奉仕活動への関心 女学校の前身を築く	
			[同志社女学校の創設] 礼法の教師を勤める	
				[奉仕活動] 日本赤十字社正社員として働く 茶道の指導者となる

図 3　新島八重のマトリックス履歴書

で率先して戦争に参加していた。その後、京都へ転居し、仏教が中心であった時代に、まだ一般的ではなかったキリスト教を宣教師のもとで学びはじめ、その後洗礼を受けている。
さらに、新島襄と結婚後は、男尊女卑が残る封建的な社会のなかで、レディーファーストを積極的に日常生活に取り入れていた。洋服や帽子を身につけたり、洋風の家を建てたりするなど、新島夫妻は海外の文化を前向きに、積極的に導入していた。新島八重は洋学の知識をいかして、女子教育も熱心に行っていた。

1878～1889 年の間には、女子のミッションスクールの必要性を実感しており、その意識が女子塾開設に深く関係している。さらに、京都への転居後、兄・覚馬の薦めもあり、女紅場の権舎長兼機織教導試補に任命されている。女紅場とは女子に裁縫や機織などの手芸、礼法や、英語、習字などの教養を教える女子教育機関である。権舎長とは舎監（寮母）のことである。新島八重はそこで権舎長として学校の運営にも携わりつつ、幼少期に男女別教育で習得した手芸・機織の技術をいかして女子教育を行っていた。その後は、女性の社会進出が盛んではなかったにもかかわらず、女紅場の運営予算について槙村権知事に直談判をしに行っていることから、男尊女卑の封建的な社会のなかでも、性別や風潮を気にすることなく、自分の意思を持って行動していることが読み取れる。
文献調査からは女子塾開設には新島襄との出会いが深く関係していることも明らかになった。新島襄は教育行政に熱心に携わっており、女子塾の開設以前の 1875 年に同志社英学校を創設している。同志社英学校とは男子の教育機関であり、現在の同志社大学の前身となった学校である。新島襄は同志社英学校創設の際、資金調達も積極的に行っていた。女子塾開設の際には、新島襄の資金調達などの支援が大きかった。新島襄だけでなく、兄の覚馬による支援もあり、女子塾開設ができた。女子塾開設には、新島八重の女子教育への熱意だけでなく、新島襄や兄・覚馬といった家族の支援が大きかったことが分かった。また、1877 年に 32 歳で同志社女学校を開校し、積極的に女子教育を行ってきた。また、開校後は指導者としてだけではなく、経営の立場としても学校に関わっていたことが明らかとなった。
新島八重は時代の先駆者としても活躍し、その一方で起業家として社会へ貢献していた一面もみられた。

3.3 津田梅子のマトリックス履歴書

津田梅子は津田塾大学の創立者である。津田塾大学とは、1900 年、36 歳の津田梅子が女子高等教育機関である「女子英学塾」として開校以来、「津田英学塾」「津田塾専門学校」と変遷を重ねながら、1948 年に学制改革とともに現在の「津田塾大学」へと発展した。現在、「小平キャンパス」と「千駄ヶ谷キャンパス」の 2 つのキャンパスを持つ東京都の私立大学である。「英文学科」「国際関係学科」「数学科」「情報科学科」の 4 つの学科がある。津田塾大学では「全人教育」という理想に基づき、学生の個性を尊重した少人数教育を行い、これまでに 2 万 9 千人を超える女性を送り出してきている[9]。

津田梅子は 7 歳でアメリカに留学しており、その後１１年間アメリカで学習を続けていた。5 人の女子留学生の中で津田梅子は最年少であった。アメリカでの生活では、現地の初等・中等教育を受けつつ、アメリカの生活文化を直接体験していた。日本に帰国した際、教養のある女性を育てようとしない日本の社会に落胆したという。その際、日本における女性の地位向上のために、女子教育の必要性を実感した。津田梅子が通訳兼家庭教師をつとめた伊藤博文の勧めにより、華族女学校の教師となるなど、アメリカでの生活中に得たものを日本の女性と分かち合おうと考えていた。自身の学校をつくることを夢に持ち続け、その後再びアメリカへ留学した。留学した先のブリンマー大学では生物学を専攻し、そこで少人数制の質の高い教育を受けた。実際、梅子の指導教官の T.H.モーガンは、後にノーベル賞を受賞し、梅子の優秀さ記している。このことが以後の津田梅子の教育観の理想へ関係していったといわれている。日本へ帰国後は、万国婦人連合大会の日本代表として渡米し、ヘレン・ケラーや英国ではナイチンゲールなどを訪問し刺激を受けており、女性のための教育に力を尽くすことを決意した[10][11]。

3.4 マトリックス履歴書からわかる二人の起業家像

津田梅子のマトリックス履歴書（図 4）からは、女性の地位向上のために、講師や家庭教師を勤めたり自ら大学へ通ったりするなど、生涯を通して積極的に教育に携わってきたことを読み取ることができる。梅子は舞踏会や婦人会に積極的に参加し、資金調達などを自分自身で行ってきた。新島八重は女紅場に勤めている際には自ら運営予算を直談判しに行ってはいたが、女子塾開設時には自身だけで資金調達は行っておらず、新島襄による資金面の支援が大きかった。また、梅子は大学で、生物学を専攻し学位を取得するという大人になって自らの意思でスキルを習得している。一方で

0～18歳	18～20歳	20～25歳	25～28歳	28～36歳	36～65歳
1864～1882	1882～1884	1884～1889	1889～1892	1892～1900	1900～1929
自由な雰囲気の家庭 6歳で渡米 キリスト教の洗礼 ロングフェローとの出会い ホイットニー家が津田家を訪問 理数系で優秀な成績	日本の風習への違和感 日本社会との矛盾	クララが留学手続きに協力	女子教育への支援者獲得 生物学を専攻	ヨーク大僧正との出会い ヘレン・ケラーを訪問 ナイチンゲールを訪問	
	米国より帰国 メソジスト教会での教職 宣教師への批判 伊藤博文家の家庭教師 下田歌子と知り合う 鹿鳴館の舞踏会 鹿鳴館バザーに参加	教職への具体的関心 日本の将来展望を把握 教職の具体化 有力者の知遇 有力者夫人の知遇	専門家としての学位取得 日本の女子教育への意思	英学塾設立資金の寄付 女子教育への課題把握	英学塾から宗教色を廃す 運営協力者の確保
		華族女学校に奉職 ベーコンに留学を進められる クララが留学手続きに協力	アリス・ベーコンの執筆に協力 ブリンモア大学との交友		
			ブリンモア大学への留学 生物学を専攻 学位取得 8000ドルの教育基金を集める	科学的な見方 教育専門家としての活動	英学塾の設立資金
				再度華族女学校で教育 明治女学院講師を兼任 高等女学校令 桜井彦一郎の協力 デンバー婦人大会に参加	実務担当者
					女子英学塾創設 ベーコンの無報酬協力 新渡戸、巌本善治の講義 大山捨松等の支援 専門学校令 1929没

新島八重は、幼少期という早い段階で洋学へ関心を寄せており、その後、京都へ転居後にキリスト教を学んでいる。教育現場で指導していた手芸や機織、礼法に関しては幼少期の男女別教育によってスキルが身についていたのである。したがって、津田梅子は学位を取得し、専門的な立場から起業・指導を行っており、新島八重は幼少期に習得したスキルをいかして起業・指導を行っていたということがいえる。

津田梅子は、新島八重よりも 19 歳年下ながら、65 歳で亡くなっているため、87 歳まで生きた八重の人生に重なってしまう。また、二人は、梅子と共に渡米した会津藩出身の女子留学生、大山捨松を通して互いに接点を持つことになる。大山捨松の兄である山川浩と山川健次郎は、八重らと共に戊辰戦争を戦い、また、捨松は、梅子が女子英学塾を設立するにあたり、経済的、精神的な多大な助力を行ったことが知られている。二人の起業家は、大山捨松という女性によって、家庭環境やキリスト教の影響等、共有するものを持つことがわかる。

4. キャリア・アンカーによる分析

エドガー・H・シャインによると、キャリア・アンカーとは、「キャリアを決定するにあたって、何かを犠牲にしなければならないときに、どうしてもあきらめたくないと感じた能力（コンピタンス）・動機・価値観」であると述べている[13]。キャリア・アンカーは自分自身の関心に沿ったキャリアの選択をするために役立つものであるとされ、これまでのキャリア・アンカーに関する研究を通じて、大半の人が８種類のカテゴリーに分けられることが分かっている。本研究では、表 2 に示すキャリア・アンカーの８つのアンカー・カテゴリーを用いて分析を行う。新島八重の生涯について、キャリア・アンカーの８つのカテゴリーによる分析では、新島八重はＴＦ(専門的・職能別知識)→ＣＨ(純粋挑戦)→ＥＣ(起業家的創造)→ＳＶ(奉仕・社会貢献)の順にスキルを習得していったと考えることができることが分かった。

ＴＦ(専門的・職能別知識)とは「特定の専門・職能分野において自分の技能を応用し、常に高いレベルを目指し続ける」「仕事で専門領域について挑戦し続けることに喜びを感じる」というものである。幼少期に、洋式砲術の技術や知識を学び、会津戦争時にはスペンサー銃を持ち、女性でありながらも、最前線で戦った。また、洋式砲術を学ぶともに洋学の知識も深めていった。洋学の知識を獲得した背景には兄の山本覚馬が関係している。覚馬は江戸で蘭学を学び、その後佐久間象山らに西洋の砲術などを学んだ。その後、会津で蘭学所を開設した。その兄から、洋式砲術や洋学を学んでいった。洋学の知識をいかしたのは戦争時だけでは

なく、洋学の知識をいかし京都へ転居後は女紅場で指導を行っている。このことから新島八重は洋式砲術のスキルや洋学の知識をいかして戦場や女紅場などの特定の専門領域で活躍していたことがわかる。

ＣＨ(純粋挑戦)とは「解決不可能と思われる問題を解決するなど、困難な障害を乗り越える」「多様性、新奇性、困難を目的とする」というものである。当時は、男尊女卑の社会の中で、さらに当時の京都は仏教が普及しており、キリスト教など海外の文化への批判が強い中でも、新島八重は洋服を着たり、レディーファーストを実践し、夫の襄よりも先に人力車に乗ったりするなど積極的に海外の文化を取り入れるといった新奇性に挑戦する様子が文献調査から読み取れた。さらに夫である襄を呼び捨てで呼ぶこともしており、その様子を見た周囲の人々は新島八重を悪妻と非難していた。しかし、そのような周囲の評価を気にすることなく、洋風の建物に住んだり、自転車に乗ったりと次から次へと新しいものに挑戦していった。また、女紅場での指導時から八重は女子教育の必要性を感じており、積極的に指導を行っていた。これらのことから、新島八重は多様性や新奇性を積極的に取り入れ、目先の問題におじけることなく、障害を乗り越えていったことが分かる。

ＥＣ(起業家的創造)とは「失敗にめげず、自分の能力を信じ､組織や企業を創造する」「企業規模と会社の成功の度合いで自分自身の価値を測る」というものである｡新島八重は女子教育が盛んではなかった時代に、女子教育の必要性を実感し女子塾の開設に至った。仏教界からの批判を受けながらも、世間に受け入れられるかも分からなかったが、新島八重は女紅場での指導の経験など自分の能力を信じて起業に至った。

最後の、ＳＶ（奉仕・社会貢献）の概要は「誰かを助けること、環境問題を解決するなどして価値を生み出す」である。新島八重は夫である新島襄が亡くなった 3 か月後の 1890 年 4 月には､日本赤十字社の社員となり、篤志看護婦として活躍した。篤志看護婦とは、自ら志願して戦地へ出向き、負傷者・傷病者の看護を行う看護師のことである。1894 年の日清戦争時に、広島にあった陸軍の予備病院で負傷者の手当てを行った。そこでは、看護婦のリーダーとして活躍し、日露戦争時には大阪にある陸軍予備病院で看護にあたり、勲七等宝冠章、勲六等宝冠章が与えられた。宝冠章は女性のための勲章であり、新島八重は皇族以外の女性で初めて授与された。このような新島八重の社会奉仕活動により、看護婦の地位を向上させることができ、同時に女性の地位向上にも貢献し、のちに「日本のナイチンゲール」とも呼ばれた。社会貢献への意識の高さには、会津戦争時に傷病者の看護にあたった経験が深く関係していると考えることができる。

表２　８つのアンカー・カテゴリー

	名称	概要
1	TF：専門的・職能別能力	・特定の専門・職能分野において自分の技能を応用し、常に高いレベルを目指し続ける ・仕事で専門領域について挑戦し続けることに喜びを感じる
2	GM：経営管理能力	・組織内で高い地位につき、人々の努力を統合し、結果全体に責任をもち、管理能力を発揮する
3	AU：自立・独立	・自営業や自立性の高い職務を選ぶ ・業務時間と仕事のやり方に柔軟性のある仕事を担当する
4	SE：保障・安定	・雇用の安定と職務や組織での勤続を求める ・常に保障や安定に関心をもっている
5	EC：起業家的創造性	・失敗にめげず、自分の能力を信じて組織や企業を創造する ・企業規模と会社の成功の度合いで自分自身の価値を測る
6	SV：奉仕・社会貢献	・誰かを助けること、環境問題を解決するなどして価値を生み出す
7	CH：純粋挑戦	・解決不可能と思われる問題を解決するなど、困難な障害を乗り越える ・多様性、新奇性、困難を目的とする
8	LS：生活様式	・自分自身、家族、キャリアのニーズを統合し、キャリアを構築する

5. 考察

新島八重と津田梅子に共通していえるのは、キャリア・アンカーが、ＴＦ(専門的・職能別知識)→ＣＨ(純粋挑戦)→ＥＣ(起業家的創造)→ＳＶ(奉仕･社会貢献と遷移することばかりではない。共に、ＴＦで習得したスキルは、二人が将来最も活躍する学校創立と必ずしも直結していないことである。たとえば、八重は、砲術の名手であったが、設立した学校はもちろん砲術を教えるところではないし、砲術で得たスキルが直接学校創立に役立ったとは思われない。また、梅子もアメリカの大学で生物学を専攻しながら、英学塾を創立している。両者とも、自ら得たスキルをそのまま用いるのではなく、その時代の社会が求める学問を教える学校を設立している｡今でいう時代のニーズに合った｢顧客志向｣を試行していると言える。

新島八重が起業に至った要因としては、夫である新島襄や、兄の山本覚馬といった家族の支援が大きかったと考えられる。新島襄は、女子塾開設の前年に、現在の同志社大学を創設しており､女子塾開設の際にも、資金調達などで積極的に支援を行っていた。兄である覚馬に関しては、起業よりも前に新島八重を女紅場の権舎長兼機織教導試補に推薦した。このことも新島八重が教育分野において起業する上で大きな要因となったのではないかと考えられる。しかし、家族の支援だけではなく、新島八重が幼少期に形成した社会貢献への意識の高さや、初期に獲得した洋学の知識を深く関係していると思われる。それらが結びつき、スキルを存分にいかすことが出来る教育分野においてに新島八重は女子塾開設という起業に至ったのではないだろうか。また、新島八重の社会貢献への意識の高さは幼少期に学習した、「什の掟」や「日新館童子訓」によって

形成されたと考えらえる。

一般に企業の経営者には３つのタイプがあると考えられている。それらは「サラリーマン社長」「実業家社長」「企業家社長」である。[14]「サラリーマン社長」とは現代の大企業に多くみられ、出世をして社長になるケースと天下りで社長になるケースがある。全般的にバランス感覚に優れていて、安定感がある。「実業家社長」はオーナー社長のことであり、中小企業に多く、社長が世襲制となっているケースである。「企業家社長」は新たなものにチャレンジする創業社長のことであり、ベンチャー企業の社長はこのタイプといえる。

本研究で、教育分野における女性起業家として取り上げた、新島八重と津田梅子は企業家社長のタイプであると考えられる。新島八重と津田梅子は男尊女卑の時代に、積極的に女子教育を行っており、女性の社会的地位の向上にも貢献するなど、女性の活躍という新しい可能性にチャレンジしている。また、「教育分野における起業」といっても、学習塾や学習支援、大学の設立まで、起業のタイプはさまざまであることも分かった。しかし、共通するものとして「周囲の協力・支援」が挙げられる。事例として挙げた女性起業家２人は、独力ではなく、家族や友人の支援のもと起業していることから、教育分野での女性の起業は独力のみでは難しいと考えられる。

同志社女子大学の前身となる女子塾を開設した新島八重、津田塾大学を創設した津田梅子を分析したところ、共に、それぞれ起業する以前より女子教育の必要性を実感していたことが分かった。さらに、それぞれが実際に創設した教育機関はいずれも女子教育に特化したものであった。これらの共通点から男尊女卑の風潮がのこる時代においても、女性の活躍が期待されている現代においても、女子教育は必要とされていると考えられる。さらに、教育分野における女性起業家は、同性である女子教育に特化した事業をはじめる傾向があると思われる。先行研究により分かった「女性起業家は主に同性をターゲットとして起業している」という点にもつながる。今後は、より女性の社会進出、地位向上が期待されていき、それにともない、女子教育に特化した新奇性のある事業をはじめる女性起業家が増えていくのではないだろうか。

6. おわりに

本研究を進めていく中で、現代では、少子化のため男女ともに教育分野での起業が少ないということを知った。また、教育分野にかかわらず、女性の起業家そのものが非常に少ないということも分かった。さらに起業時の課題としては、「開業に必要な資金の調達」や「事業についての専門的知識・運営に関する知識、ノウハウ不足」などが挙げられた。教育分野では、教育機関を創設するには多大な資金が必要とされる。新島八重のように夫である新島襄の資金面での支援があれば、起業に至ることができるが、そのような支援がないなか、独力で起業するということは困難である。

一方で、現在の日本国内には学校や学習塾などが数多く存在している。指導するための豊富な知識やテクニックなどの独自の強みがなければ起業したとしても生き残っていくことはできない。教育機関のなかでも学習塾は、生徒の親が自分の子どもを教える指導者の学歴を気にする傾向が多くみられる。また、高等教育機関である大学の存続には、資金調達だけでなく、研究や指導力なども求められている。そうした中で、同志社女子大学や津田塾大学が百年を経て存続していることに、教育分野での起業家としての新島八重と津田梅子の足跡に改めて感嘆せざるを得ない。

文　献

[1] 内閣府：男女共同参画白書平成 25 年度版,2013 年
[2] Ｐ．Ｆ．ドラッカー：上田惇生[訳]：[新訳]イノベーションと起業家精神(上)―その原理と方法―, 1977 年
[3] 日本政策金融公庫総合研究所：女性起業家の実像と意義－2013 年度新規開業実態調査（特別調査）」から－,調査月報 pp.5-20,2014 年 4 月
[4] 大野邦夫,西口美津子：マトリックス方式による職歴情報の評価とキャリア設計の検討,2013 年
[5] 楠木誠一郎：新島八重と新島襄 「幕末のジャンヌ・ダルク」と「平和の使徒」と呼ばれた夫婦,PHP エディターズ・グループ,2012 年
[6] 吉村康:歴史物語　新島八重の生涯, 歴史春秋出版株式会社,2012 年
[7] 山下智子:新島八重ものがたり ,日本キリスト教団出版局,2012 年
[8] 鈴木由紀子：ハンサムウーマン　新島八重, NHK 出版,2012 年
[9] 津田塾大学ホームページ（http://www.tsuda.ac.jp/）
[10] 山崎孝子：津田梅子,吉川引文館,1962
[11] 大庭みな子：津田梅子,朝日新聞社,1990
[12] 大野邦夫、西口美津子：日本における女性起業家のスキルに関する一検討』情報処理学会研究報告,2014 年
[13] エドガー　H.シャイン：キャリア・アンカー(Ｉ)セルフ・アセスメント,2009 年
[14] 横浜市中小企業指導センター編：企業に失敗しないための起業家読本　ビジネスプランから会社設立・運営まで,同友館, 1998 年